



世田谷文学館友の会

会報 第53号

平成30年5月31日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南島山1-10-10
TEL 03-5374-9111
FAX 03-5374-9120
ホームページ
<http://setabuntomo.net/>

総会記念講演

池澤夏樹氏

「文学で知る古代日本人の性格」

堀 伸雄

「池澤夏樹さんは、日本という境界をまたぎ越してものを見ている。文明の中心地からではなく、文明から外れたところから日本を見てこられた」と、講演当日、札幌から駆けつけてこられた池澤氏のプロフィールを、竹内修司氏（会員）は的確に紹介された。今年生誕百年を迎えた詩人・作家の福永武彦を父に持ち、ギリシヤで三年間、沖縄で十年間そしてフランスで五年間を生括者として過ごされ、その培われたグローバルな視野と高い発信力をもとに、「世界文学全集」（三十巻）を東日本大震災の前日に完結。続く「日本文学全集」（三十巻）も完成間近という文学への飽くなき姿勢を示されてこられた。池澤氏のお話の前半は、世界文学全集の編纂について声がかかり、紆余曲折を経て、「池澤夏樹Ⅱ個人編集」の形で発刊が実現し、更に日本文学全集の刊行に連なったプロセスについてである。そこには「文学とは何か、日本人とは何か」という根源的な問いかけに対する氏の深い洞察がある。後半は、日本文学全集の先陣を切って自ら挑戦した『古事記』の現代語訳を通じて体感された古代日本人の性格を、現代人に通じる形で語られた。

文学全集の皮切りは一九二六（大正十五年）の改造社の「現代日本文学全集」。経営再建をめざす当時の山本実彦（さねひこ）社長が全く新しい出版形式を世に問う。予め出版内容を新聞公表のうえ、全巻を予約販売制とし、意地でも出版するという覚悟の大博打であった。この方式は大ヒットし、新潮社等其他の出版社も追随、戦後の住宅事情の改善も追い風に、どの家庭にも全集が備えられるという長い教養主義の時代に入る。しかし、次第に文庫本の流布等、文学書も「教養財」から「消費財」へと変わっていく。出版文化がこのような趨勢を辿る中、フランスに在住中の池澤氏は、河出書房新社時代の仲間から、同社の創業記念企画として世界文学全集の編纂を打診される。



穏やかな語り口で、真摯に
話される池澤夏樹氏

2018年4月14日

於・文学サロン

撮影・若宮利夫氏

今さら時代錯誤も甚だしいと、けんもほろろに断ってはみたものの、その後も、若手編集者が粘り強く関心を抱いている姿に新しい萌芽を感じ取る。秘かに自分なりの作品リストを作成。試行錯誤と熟考を重ねる

うちに、今まで全くなかったものを作り、それに「世界文学全集」を冠する考えに至る。旧来の古典を排し、第二次世界大戦終結から現代に至る各国の文学作品を三十巻にして、「世界文学全集」として銘打つという斬新な発想である。文学の生産地の中心がロンドン、パリ、モスクワだった時代から大きく転換し、植民地からの独立、女性たちの独立、地球規模の人の移動等を反映した作品を視野に入れながら作品リストを彫琢した結果、ベトナム、ハンガリー、ラテンアメリカ等を加える。日本からは、池澤氏が日本語で書かれた世界水準の作品と評価する石牟礼道子『苦海浄土』を入れる。これは氏の二十年間にわたる書評家としての蓄積の賜物であり、「作品は本気で選ぶことに意味がある」という氏の強い持論に基づくものである。

こうして、「池澤夏樹Ⅱ個人編集 世界文学全集」（全三十巻、河出書房新社）の刊行がスタート。第一回配本が二〇〇七年十一月、最終巻の発刊は、東日本大震災前日の二〇一一年三月十日であった。震災の惨禍を目の当たりにして愕然とした池澤氏は、何故にこの国には、こんなに自然災害が多いのか、そういう国で過ごしてきた日本人はどういう性格なのか、日本人とは何か、もう一度勉強したいとの思いを強くする。「日本人とはどういう人間かわかるかもしれない」との覚悟の思いから再び日本文

学全集の構想を練る。今回も三十巻とするが、三分の一を占める古典は全て現代語訳にする。めざすのは古文ではなく文学。重要なのは文体であり、文体を持つのは学者ではなく作家である。その信念から現役の作家に依頼することとし、候補者リストをもとに打診。九割方の人が二つ返事で「面白い」との反応。当初、総指揮官を決め込んでいた池澤氏も、父・福永武彦も訳した『古事記』の翻訳を自ら担当する。最大の課題は、長編『源氏物語』の訳者。既に、与謝野晶子、谷崎潤一郎等、著名作家による現代語訳があるが、あくまでも新しいものをやりたいとの一念から、最もあぶらの乗った仕事盛りの角田光代さんに声をかけた。

「池澤さんに言われればやるしかないでしょう」と、角田さんを「源氏」で拘束することになり、日本中の編集者から恨まれたと氏は笑う。

「池澤夏樹Ⅱ個人編集 日本文学全集」（全三十巻、河出書房新社）は、最後を飾る角田光代訳『源氏物語』全三巻の刊行をもつて二〇一八年十二月に完成の予定である。

池澤氏は、自身の『古事記』の現代語訳の作業を通じて明らかになった古代日本人の性格を、四点到に集約された。第一に、古代人は気性がまっすぐだということ。話の展開が早く、ためらわない。翻訳のとき、このスピード感を何とか残したいという思いから、たたみかけるように訳した。父・福永武彦の翻訳にも言及。福永訳は言葉の説明を本文に繰り込み、まどろこしいため、説明は下欄を読めばわかるように工夫した。第二に、ともかく色事が好き。『万葉集』には相聞歌があり、『源

氏物語』の光源氏は想うだけでなく「実行」の連続。『古事記』ではイザナキ（伊邪那岐）とイザ

ナミ（伊邪那美）の行為で国が生れ、それが始まりとなっている。民の竈の逸話で儒教的には立派であるとされている仁徳天皇でも正妻・イハノヒメ（石之日売）にまつわる物語など女性関係のゴシップに事欠かない。古代人にとり、色事は豊穰祈願を原点とする世界観なのである。第三に、弱者・敗者たちへの共感。『古事記』に描かれている実父を後の雄略天皇に殺害されたマヨワ（目弱王）という御子の復讐譚や、長征の末、悲運のうちに落命するヤマトタケル（倭建）の伝記などには、勝ち誇った姿は描かれていない。第四に、女性の地位が高かったこと。大きな文学を生み出した女性作家は、平安時代から応仁の乱あたりで途絶え、長いブランクを経て次に輩出したのは樋口一葉や女性歌人の時代である。現代では芥川賞の受賞者や選考委員も女性の活躍が目覚ましく、他の分野でも女性の活躍にエールを送られた。

最後に、『池澤夏樹、文学全集を編む』（編集部編 河出書房新社・二〇一七年）の抽選もあり、穏やかな池澤氏の語り口から、「本を読むこと」の無上の喜びを、来場者が等しく共有できた記念講演であった。



『池澤夏樹、文学全集を編む』（河出書房新社）

（友の会会員）

平成三十年度・友の会総会抄録

平成三十年度「世田谷文学館友の会」総会は四月十四日（土）午後一時から同館一階文学サロンで開催された。司会は堀伸雄企画委員。

冒頭、平出洗会長から本年が友の会発足二十周年に当たること、三館友の会交流行事を今秋大会が幹事として行うことなどの報告があった。

次に菅野昭正世田谷文学館館長から、「IT時代になっても、文学は私たちの生活にとって大切なもので、さらに振興していきたい」とのお話があった。この後、平出会長を議長に指名し議事に入った。

一、平成二十九年活動報告ならびに収支報告

柴田光滋副会長から活動と収支の報告を行った。続いて鈴木廣義会計監事から適正との監査2報告があった。会員から、「会員数減少の背景と対策は」との質問があり、平出議長が「一般的な文学離れ、出版離れがあるが、友の会ホームページの開設などで入会促進を図りたい」との答弁を行った。以上、拍手承認。

二、役員紹介（二年任期のため改選は無い）

三、平成三十年度活動計画ならびに収支予算案

柴田副会長から今期の活動計画を説明。ほぼ、例年並みの活動を予定していること、会費値上げにより、会員減もありうるが財政的には健全化する見通し、と説明。以上、拍手承認。

総会終了は一時三十四分。総会出席者百二十四名。（議決資料は同封）

“ えっ！？ 世田谷？ ”

関川 夏央

世田谷に越したのは二〇〇三年の秋だった。

それまで新宿区神楽坂上の賃貸マンションに住んでいた。しかし家賃が高い。このまま払い続けられればいずれ破産、と妻に警告された。

妻は、不動産のプロの女性友人と家さがしに出かけた。地域は限定しなかった。値段だけが問題だった。ある日、彼女がいった。世田谷にした、借地の上に乗っかって中古住宅に決めた。えっ！？ 世田谷？ 私は問い返した。反対したのではなかった。世田谷にはまるで縁がなく、不安だったのだ。

私は一九六八年に上京して、杉並区高円寺の三畳に間借りした。そのあと友人の借りていた北区滝野川の部屋を受け継いだ。以来、上京者が最初に住んだ地域の周辺をなんとなくめぐるように、東京西北部に十五年住んだ。

三十代前半、西武池袋線沿いの借家を追い出され、友人の書き手グループが借りていた千代田区番町のマンションに仮住まいした。いわば緊急避難であったが、二年半で簡易ベッドの底が抜けた。友人たちは迷惑したと思う。

それから二十年近く、渋谷区、新宿区と都心部に住み、一か所の滞在期間はそれまでの三倍くらいになった。「東京北西部時代」には平均一年半くらいで引越していた。いい加減にアパートや借家を決めた結果だ。

結婚したのは世田谷区祖師谷に越す直前で、住宅ローンを借りるとき、すでに同居久しかった彼女が届けを出しに行った。

家さがしに関して、私が一切意見をいわなかったのは、住まいに限らず、大きな買い物を自分で決めてロクなことはなかったと身に沁みていたからである。バブル崩壊直前、人に勧められて買った株は、三か月間だけ面白いように上がり、それから底なしに下がった。また上がるかも、というはかない夢は必然的に破れ、新聞の株式欄を見るのをやめて二十五年、これも妻が捨て値で処分した。

世田谷はやたら広い。東京の中流層が大量に住んでいる。一方通行や袋小路が多くてタクシーが嫌がる。そんな知識しかなかった場所に住むことになるうとは。人生のめぐりあわせは不思議である。

その中古住宅の内装のやり替えが終り、引越し荷物も運び終わった頃、私はひとりで車と最後の手荷物を運んだ。まだナビがなかったから、世田谷の複雑な小道に迷った。何度か電話で指示されながらたどり着いて、はじめて家を見た。かなり大きな家だった。見上げながら、やはりとても自分では決断できない、任せきってよかった、と思った。これからは生活上の重要なことはすべて妻任せに、ひっそり生きようと決意した。

以来十五年、すっかり世田谷に慣れた。小田急の複々線は長い長い工事の末に完成した。老人ばかりで大混雑、と当初はうんざりした祖師谷商店街だが、いまはその老人の群れのひとりとなって、それなりに機嫌よく日々を送っている。

(作家)

作家紹介 一九四九年、新潟県生まれ。著書に『子規、最後の八年』（講談社）、『人間晩年図鑑』（岩波書店）など。

わたしの一冊
『新釈諸国噺』より
『吉野山』
太宰治著
新潮文庫
田中 宏子

若い人達に熱狂的な愛読者をもっていた（現在は解らないが）太宰治の作品を私も若い頃御多分にもれず一通り読んだが、何故か二度読む気はしなかったように思う。

しかし、最近太宰の『吉野山』を再び読む機会を得た。若い頃読んだ時はそれほど思わなかったが、時を経て読み直すと実に面白可笑しい。

太宰は女性問題でトラブルを起したり、禁止されている政治活動で逮捕されたり、自殺未遂を数回繰り返したり（三十八歳で入水自殺をするのだが）と苦難の人生を送ったと知ると、深刻な作品を残す作家と思われがちだが、『新釈諸国噺』の中で唯一手紙形式で書かれている『吉野山』は、『人間失格』3等暗い話（？）を書いた人とは思われないユーモアたっぷりに書かれている。

話は、一時の勢いに任せて出家したものの俗世間の未練を捨てきれず、都の知人に宛てた手紙である。極寒の山中での不自由さ、里人の冷たい仕打ち、金銭のややこしい問題、遊ぶお金ほしさに祖母の百両を失敬してしまい露見することへの恐れ等々に加え、友を失いその寂しさに後悔の念を覚えたのか、吉野へ友が会いに来てくれるのを楽しみにしているとといった筋である。これがフィクションなのかノンフィクションなのかはともかく、私のイメージを刺激し、太宰独特のユーモアある表現力、構成力のすばらしさを実感した。太宰の作品イコール暗いという印象をもった人にはぜひ読んでほしいと思う。

(友の会会員)

講座 王朝和歌のたのしみ

「百人一首を読む」を聴いて

新井 圭子

立冬を過ぎた小春日和の午後、楽しみにしていた古典講座に出席させていただいた。

講師の上野英二先生は平安朝文学の権威で、現在成城大学の教授をされておられ、そのご経歴からはお見受けできない穏やかなご容姿で、お声は爽やかで歯切れよくユニークに自己紹介をされた。

先生は時節がら、秋の歌二首を選ばれた。

はじめに取り上げたのは、菅原道真の「このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」で一語一語くわしく解説され、更にそれに関連する事柄をピラミッドのように広げて説明してくださった。先生の独特な話術もあり興味深く伺うことができた。この歌の要旨は、今回の旅は安全を期すための幣を準備することが出来なかったかわりに山の美しい紅葉を見立てて御心のままにお受けくださいということ。先生は道真が同時に作った漢詩の紹介や百人一首のその他の紅葉の歌の説明もされた。幣とはいかなるものかとの説明は、わざわざ紙を細かく切り刻んでパツと振り撒いて見せてくださった。その熱心さには感動した。

次に同時代の在原業平朝臣の歌「ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくると

は」でこの歌は実際にその景色の中に佇み詠んだ歌ではなく屏風に貼った絵を素材にして詠まれた屏風歌とのこと。この歌は古典落語の演目にもあり、まず先生は落語の方を話してくださった。知ったかぶりのご隠居となじみの八五郎のやり取りの中で花魁

千早と神代に振られた相撲取り竜田川の話で、隠居は苦し紛れに「千早」は花魁の名で「とは」が本名だと答え一件落着する。なかなか楽しい解説だった。いよいよ本歌の説明に入り、「ちはや」は疾風、「ちはやぶる」は神に掛かる枕詞、「神代も聞かず」とは日本古来の神代にも聞いたことがない、「竜田川」は竜田山のほとりを流れる川で紅葉の名所と同時に着物の柄や陶器の絵付けに用いられ、水が流れそこに紅葉が浮いて流れているという有名な模様のこともあった。先生は小さな絵皿を持ってこられて見せてくださった。

「からくれない」という色は、日本には古くから「藍(青)」の染料があり、奈良時代以前に中国より新しく赤い染料が渡来したので「呉の藍(くれない)」と呼んだ。さらに平安時代初め、韓(朝鮮)から新しい赤色の染料が輸入され「からくれない」という名がついた。当時の人にとっては見たことがない美しい赤だった。その色に染めあげたくくり染めが竜田川。その色を詠んだ業平は新しいセンスの持ち主でスケールの大きい、大胆な風景を詠んだ。先生の力の入ったご説明で「からくれない」という色が私の心にしっかりと印象付けられた。流行の先端を詠んだと同時に動きが感じられ、はらはらと散る紅葉、そして川を流れる散り行く紅葉の美しさを詠んだ。残りの九十八の歌も是非掘り下げて学ぶ機会を期待したい。

(平成二十九年十一月 十日 世田谷文学館にて開催)

(友の会会員)

「古典で楽しむ浦島太郎伝説」へ参加して

菊地 淳一

昨年の秋の候だったと記憶をしているところですが、私はBSジャパン(テレビ東京系列局)の或る紀行番組で丹後国、現在の京都府の丹後半島を訪問(周遊)するのを拝見しました。その時には東京方面より東海道新幹線を経由して、京都市の東山区清水寺等から旅が始まり、冒頭部分で京都府内の全体地図で位置確認をしてからの出発でした。宮津方面そして日本三景の一つである天橋立方面へ、最終的には北近畿タンゴ鉄道線の利用で現地に無事到着しました。その事を思い出しながら今回の講座を受講いたしました。確かに番組内でも浦島太郎伝説の事をナレーターと旅人の女優さんが話していました。そして今回の講師は友の会の現会長、平出洸氏のお話ということもあって、私自身とても親近感を覚えました。

日本には孫子の代迄残していかなければいけないと思うとても素晴らしい童謡や唱歌が数多くあると思います。その中の一つが今回のテーマでもある浦島太郎です。まさか文学館の講義室内にて懐しき曲を口ずさんでいる自分自身も、まだそれ程の齢ではないものの懐しさを覚えてしまいました。そして懐しいと言えはかつて何十年前だろうか学生時代に国語科の授業で学校にて学んだ『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』そして更には様々な逸文や雅歌が詠まれていた事を意外と知らないと思うくらいでした。そして「反歌」、「水鏡」、「古事談」と続



き、『御伽草子』は私自身は余り存じてはおりませんでした。『古川柳』を十項目挙げた中のひとつ、「乙姫は浅草海苔で鼻をかみ」の作品が特に印象に残りました。会の後半には、径こみちの会の森氏の朗読へと移行して行きましたが、常日頃から日常的に朗読を経験されているご様子で、とても雰囲気のあるまたとても感情のこめられた余韻の残る朗読で、私自身も本当にその世界へ入ってしまいそうな程でした。

そして充実した貴重な会は本当に早いもので終演予定時刻へととなってしまいました。朝晩はまだ寒さの残る立春の候の二月上旬、開かれる時期としては日中の時間帯は暖かい陽気の中での、大変印象深い講義でした。

(友の会会員)

(平成三十年二月六日 世田谷文学館にて開催)

「エッセー」わたしの「冊」の原稿募集中!

- ・タイトルに本の題名(著者名・出版社名・出版年も)明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記・字数は六〇〇字以内(厳守)
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回



散歩

「二とし納めの文学散歩」に参加して

花井 一彦

ちょっと肌寒く感じる師走の午後、表記散歩の会に参加しました。

集合場所の東西線早稲田駅に着くと何時も散歩の会でお見かけしている方々(今回は七十余名参加)の元気なお姿に接し何となく安堵しました。早稲田駅下車は初めてなので、暫く周囲を見渡しながらかから廻る夏目漱石ゆかりの土地界隈の思いを楽しみに感じていました。

最初は「穴八幡宮」、改修間もないと覚えるきらびやかな建屋に周囲の紅葉が映え何とも素敵な景観の中、参拝をすませNP O 法人漱石山房のガイド加藤氏による社殿の経歴説明、また、漱石が気難しい人だったなど、それにまつわるお話など大変丁寧な説明を受けました。

次に訪れたのは「誓閑寺」の新宿区内最古の梵鐘を拝観、加藤氏より戦中の厳しい状況などの説明もあり、私も戦中を東京で体感したものとして戦争に対して忸怩たる思いが致しました。

次に向かったのは、忠臣蔵の中山安兵衛が決闘地高田馬場へ向かう途中立ち寄ったとされるゆかりの「小倉屋酒店」を経て漱石誕生の地へ。現在は加藤氏所有、在住のマンションで当時から現在に至るまでの貴重なお話を伺いました。又、門前には漱石の弟子の安倍能成氏の筆による記念碑も見られました。また、説明を伺ううち当時のこと、先人達のことなどが脳裏を駆けめぐり、いろいろ頭の中が交錯してしまいました。

最後は夏目坂を上り漱石終焉の地「漱石山房」へ伺いました。ここでも漱石山房の副理事長を務められる加藤氏から「山房」の現在に至るまでのお話をたっぷり頂きました。

「山房」内には漱石の生い立ちから作品(著書)、周辺の人々など種々感動するものに多く接し、大変有意義な時が過ごせたと感じました。私も夏目漱石の作品は好きでその昔よく読みましたけれど、今回の会に参加してより深く、知らなかったことなど見聞き出来ましたことは本当によかったと思いました。これも偏に文学館友の会のお世話を頂いた方々、及びNP O 法人漱石山房の方々のお蔭と深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

私にとって、漱石作で心に残る一節が思い出されるので最後にご紹介させて頂きます。それは『門』の中の一節です。

— 京介と御米は仲の好い夫婦に違いなかった。 —
— 彼らにとつて絶対に必要なものは御互いだけで、その御互いだけが、彼らにはまた充分であった。 —
— 彼らの命は、いつの間にか互いの底にまで喰いつつた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。 —

— 彼らはこの抱合の中に、尋常の夫婦に見出しがたい親和と飽満を、それに伴う倦怠とを兼ね具えていた。そうしてその倦怠の慵い気分支配されながら自己を幸福と評価する事だけは忘れなかった。 —

(平成二十九年十二月一日実施)

(友の会会員)



散歩

両国新春散歩とすみだ北斎美術館を巡る

五十野 聖子

一月十七日朝JR両国駅改札口（国技館側）に集合。折しも大相撲一月場所が開催中で、若いお相撲さんが、改札口を出入りしている。寒い朝だったが興味津々、集合場所にはうつつつけの場所であった。三班に分かれて墨田区観光協会の説明員一人・補佐一名が各班について下さる。この組み合わせは、見聞するの申し分なかった。散歩で記憶に刻まれたことを書いていきたい。

旧安田庭園は、冬景色でもきれいだっただ。ここに住んでいた安田善次郎氏とはどんな人なのか気になる。彼は富山出身で、明治になって安田財閥を設立した人で、東大安田講堂・日比谷公会堂を寄付したことでも名高い。孫には人間国宝十三代目片岡仁衛門、曾孫にはオノ・ヨーコがいる。彼は大正十年に国粋主義者に暗殺される運命をたどる。その後庭園は、寄付され現在に至る。この美しい庭園の借景にスカイツリーが出現したのを知ったなら、さぞや驚くだろうなと思った。

回向院は説明によると、明暦の大火（一六五七年）で亡くなった大勢の人を弔うために、江戸幕府が設立した寺院だ。大川（隅田川）に橋が無かった為に被害者が多く出たので、両国橋（一六五九年）が架けられた。後に、赤穂浪士が吉良邸討ち入り後（一七〇二年）、回向院で休息させて欲しいと申し出たが、幕府ゆかりの寺であるため断られ、やむなく両国橋のたもとで、休息したとのこと。芝居などでは、颯爽と泉岳寺に向かうが、実際は疲労困憊して両国

橋のたもとで休む姿が目につく。後に勧進相撲が各地で催されるようになり、天保四年から明治四十二年、旧両国国技館が完成するまでの七十六年間、回向院が春・秋興行の定場所だった。国技館が両国に建てられた訳も理解できる。観光案内所に戻り、両国散歩は無事終了した。説明して下さった皆様に感謝致します。両国の歴史や魅力が良く分かりました。楽しみにしていた昼食は、真鯛胡麻まぶし井でした。美味しかったです。

午後は「すみだ北斎美術館」をワクワクしながら見て回った。最初に「須佐之男命厄神退治之図」の迫力に圧倒される。館内に足を踏み入れると「めでたい北斎くまるつとまるごと福づくし」が開催中だ。北斎やその弟子たちが描いた七福神や縁起の良き生き物、新年の行事など「めでたい」を描いた作品がワットと感嘆するほど出品されている。北斎はあらゆる分野に新境地を追い求めた人だと思った。また北斎は十九世紀後半、セザンヌ、ドガ、モネ、ゴッホ等印象派の画家達に影響を与えたという。北斎は彼等と対等の画家として世界中から評価されてよいように思った。最後に七福神おみくじを引き、私が目標にしている生き方が書かれていて嬉しかった。新春散歩に参加させて頂き楽しい一日でした。

（友の会会員）



ヨソの文学館・記念館

【津和野町の森鷗外記念館・森鷗外旧宅】

「石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という遺言を残して、大正十一年七月九日、六十歳でその生涯を閉じた明治の文豪・森鷗外（本名・森林太郎）は、十歳で父と共に上京するまでの多感な幼少期を津和野で暮らした。

「森鷗外記念館」は津和野川沿いに位置し、南側に隣接する国指定史跡「森鷗外旧宅」を展示物の一部として取り込んでいる。記念館は鉄筋コンクリート造二階建。ガラス張りの誘導路から入館し、吹き抜けのロビーに進むと南面に広がる中庭の向こうに鷗外旧宅を見通すことができ、見事な設計となっており、すでに展示空間に誘われているのである。第一展示室では軍医として文学者として二生を生きた人生を、第二展示室では津和野時代を紹介。ハイビジョン映像もある。二階には収蔵庫、会議室、学芸員室などもあり充実している。

ちょうど川向いに鷗外の三十三歳上で親戚の西周（にしあまね）の生家（国指定史跡）がある。両家とも津和野藩の御典医の家柄。西周は明治の啓蒙思想家として文明開化の推進に多大な功績を残した人物だが、西の活躍が如何に鷗外を刺激したかは想像に難くない。館の小憩ホールからは、二人も眺めたであろう津和野川の流れと中世山城の典型を成す三本松城の石垣を望むことができる。

住所 島根県鹿足郡津和野町田イニ三八
電話 〇八五六―七二―三三二〇
入館料 一般六百元（森鷗外旧宅見学料含む）
休館日 月曜（祝日の場合翌日）、年末三日間

（友の会会員 幾田充代）

四つの文学館友の会、会員として

札幌より 山形 健次郎

北海道生まれで、札幌に五十年近く住んでいながら、四つの文学館の友の会に入会させていただいている。

入会の最初は、地元札幌の「北海道立文学館」で、現在の館長は、ロシア文学の工藤正広氏、催事の案内が充実していて、寄稿を求められることもある。入会日は失念。

「司馬遼太郎記念館」は完成を待つて友の会に入っていたので、平成十三年からと古いが、東大阪は遠いので、「菜の花忌」の集りには参加したが、未だ入館したことはない。季刊の会報は内容も濃厚で保存版の分類。編集人が知人であって、誘いを受けての入会。

三つ目が、当「世田谷文学館」で、平成十五年夏。

「寺山修司青春時代展」が催され、寺山の私宛ての書簡類九十点程が展示されたのが縁で入会させていただき、今日に至っている。世田谷の展示会では、多くの作家・歌人・評論家と顔を合わせることが出来たが、忘れ難いのは、財団の理事長であった、元日銀総裁の三重野康氏と親しくお話させていただいたことである。

世田谷ではその後も「帰って来た寺山修司展」にも、手持の資料を使っていたが、文京区に住宅があることも幸いして、催事には参加させていただいている。

こうしたご縁も、実は地元の「北海道立文学館」が、平成十四年に、札幌大学長であった、文化人類

学者の山口昌男先生が中心となって、同館を使い「テラヤマワールド展」を企画実行されたことに、それまで寺山との関係を全く秘匿していた私が、触発され、自分の美術ギャラリーで彼の未発表作品などの展示をしたことが、世田谷での展示に連なつたと考えると、地方の文学館が持つ情報発信の役割は評価されて良いと思う。

そんな個人的な経緯があつて、最後に入会したが、「青森県立文学館」で、幾度か訪ねているが、この六月で寺山が生きていたら同年の八十二歳、新しい文学館の設立もないようで、これ以上は増えそうもないと、この原稿を書いて考えるに至りました。

(友の会会員)

せたぶん・うおっちゃん



『澁澤龍彦集成V』

鈴木 美奈子

せたぶん一階の閲覧室に入ると、まず棚の中央に澁澤龍彦の全集、それも白水社版・桃源社版・勁草書房版などがずらりと並んで目を牽きます。

澁澤龍彦については、つい先頃「ドラコニアの地平」と銘打った展示会が催されていたので、ご覧になった方も多いことでしょう。

ここに紹介するのは、桃源社版昭和四十五年六月刊の『澁澤龍彦集成V』——評伝・創作・翻訳篇で、全六巻のうちの一冊。全巻函入りで黒の地に金と緑をあしらったタイトルという瀟洒な表装。評伝などは読みやすいようです。

世界悪女物語・エリザベス女王、メアリー・スチュアート、マリー・アントワネット、アグリッピナ、クレオパトラ、則天武后、マгда・ゲッペルスなど

異端の肖像・バヴァリアの狂王ルドヴィヒ二世、恐怖の大使サン・ジュストなど

ほかに、ビアズレーの「美神の館」とコクトオの「大股びらき」などが収録されています。



サン・ジュスト

異端のエピキュリアンにして厳密な古典主義者と称される澁澤が、学生時代、机上の右にはサド侯爵があり、左にはサン・ジュストがあつたというのは興味深く、この対照的な二つの白熱する魂は、わたしを熱狂させずにはおかない、と書いています。一九六〇年代を象徴する、かのサド裁判のサドについては、第II巻、サド文学関係篇(サド侯爵の生涯他)に集録。サン・ジュストと同じくサドも又、バステイーユ陥落の時、獄より解放されたフランス革命の落し子でありました。

(友の会会員)



～こういう催しがありました～（2017年11月～2018年4月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2017 年 11 月 10 日	講座 王朝和歌のたのしみ — 百人一首を読む —	上野 英二氏	菅原道真「このたびは幣もとりあへず手向山・・・」、在原業平「ちはやぶる神代も聞かず龍田川・・・」を取り上げ、その神髄を深く解説いただいた。初めて真の内容に触れ、この二首だけは自慢の取り札にしたいものと願った。いつもの蕎麦屋の竜田川文様の暖簾をくぐるのも感慨一入である。
2018 年 2 月 6 日	講座 古典で楽しむ浦島太郎伝説	平出 洸氏 朗読 森ゆり子氏 (こみち 径の会)	「浦島太郎」の説話のルーツは古く、『日本書紀』・『万葉集』・『丹後国風土記』にまで溯る。丹後半島北部の「浦嶋神社」に伝説があるという。江戸期の『御伽草子』まで順に読み進み、最後に、明治期の巖谷小波『日本昔噺』の中の「浦島太郎」の朗読を聴く。皆で童謡も合唱。童心に返るも、何故に伝承されてきたのか古の人々に思いを馳せる不思議な時間でもあった。
4 月 14 日	総会記念講演 文学で知る古代日本人の性格 (文学館と共催)	池澤 夏樹氏	「池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集」(全 30 巻) が 2011 年完結、奇しくも東日本大震災の前日のこと。続いて 2014 年に「池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集」(全 30 巻) の第一巻、池澤夏樹訳『古事記』から刊行を開始、2018 年 12 月に角田光代訳『源氏物語』全三巻を刊行完了すればこちらも完結する。この一大事業を成し遂げた氏の内なる魂とエネルギーを垣間見る講演であった。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2017 年 12 月 1 日	散歩 ことし納めの文学散歩 夏目漱石没後 100 年 (2016) ・ 生誕 150 年 (2017) 記念 新設「漱石山房記念館」 と周辺の漱石故地を訪ねる	NPO 漱石山房 加藤 利雄氏、 館の説明員の 皆さん	9 月、漱石が晩年の 9 年間を暮らした家の跡地に「漱石山房記念館」が開館。幸運にも地元の漱石生誕の地にお住まいの加藤氏にご案内いただいた。漱石のエピソードを交えた詳細な解説は貴重なものであった。穴八幡宮、誓閑寺を含め、記念館へ続く夏目坂は、行き交う人で今後一段と賑わうことであろう。
2018 年 1 月 17 日	新春散歩 お江戸両国、小粋に歩く ～すみだが誇る世界の絵師、葛飾北斎の生まれをたどる～	墨田区観光協会ガイドの皆さん	両国では「すみだ北斎美術館」が開館一周年を迎え、上野でも「北斎とジャポニスム—HOKUSAI が西洋に与えた衝撃」展を開催。北斎づくしの新春に、大相撲一月場所でも活気づく両国に足を踏み入れると、そこはいきなりお江戸の風情。年の初めのおめでたづくしの新春散歩であった。

編集後記

文学館に伺うときは、まず 1 階の“ほんとわ”を覗く。素通りはせず敬意を表する。若い来館者が本を拾い読みしている。閲覧用の図書はとても幅が広い。サブカルチャーの品揃えには驚かされる。世田谷の文人植草甚一の長い長い題名の本の数々。J J 氏には地元経堂の E 古書店で遇った。寺山修司のエッセイ集、少年時、戦後の回想か

ら、昭和末期の盛り場の日常まで。同時代を生きた私には、旧友の際限のない会話に似ている。ミステリーやファンタジー、コミック、パロディ、考証本などはさらに嬉しい。オタク本といったは礼を失する。閲覧室の奥はプレイングルームで幼児たちの声が耳に快い。
(藤野 寛)